

4企業が技術提案

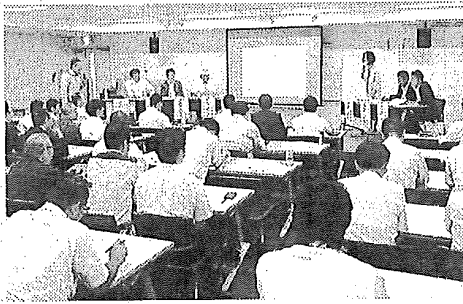
マッチングに向けて討議

大分でインフラメンテ会議

インフラメンテナンス国民会議九州フォーラムは7月30日、大分市のJ・COMホール大分で第2回ピッチイベントを開いた。写真。橋梁点検の技術について大分県国東市と日田市の2団体が課題やニーズを説明し、それに対するシーズ技術を4企業が提案しマッチングを図った。パネルディスカッションによる技術の深掘りなども行った。

冒頭、フォーラムリーダーの日野伸一大分工業高等学校長は、2回目のイベント開催が大分になったことについて「会議の目的の1つに九州全域の波及を掲げており、（福岡市以外での開催は）大変意義深い」と説明した。イベントには産学官から約190人が参加し、大分からは県内19自治体のうち、県を含む18自治体が参加した。

二一ズ説明した国東市は、大分空港道路の跨道橋の1巡目点検で、通行止めによる協議に時間がかかり、夜間作業により経費もかさんだことを踏まえ、ロボットやAI（人工知能）などによる点検技術



を求めた。また、全体の6割（345橋）を占める15歳未満の橋梁については歳出削減の観点から、将来的には直営での点検を理想としており、技術力がない職員でもスムーズに点検できるシステムを求めた。

また、ツタワルドボクの片山英資代表理事をファシリテーターに、大分県や大分市、宇佐市の地元自治体、九州地方整備局、コンサルタントを代表して千代田コンサルタントらが登壇し、インフラメン

テナンスの課題について討議した。自治体からは、整備局の点検技術講習が福岡県久留米市の九州技術事務所のみで行われていることに「大分からは遠く、参加しづらい」と説明。また、新技術の活用では「実績がないと使いつらく、検証まで行う体力もない。国や県が率先してほしい」と訴えた。

これらに対し、特殊高所技術が「特殊高所技術工法」、日建コンサルタントが「UAVおよび赤外線サーモグラフィを活用した橋梁点検、クラウド型GISシステムを使った道路ストック管理」、富士ピー・エスが「コンクリート内部欠陥の非破壊調査技術（FITS A）」、CACHが「ひずみ・亀裂モニタリング（監視）システム」をそれぞれ提案した。

この後、2自治体と提案企業が抱える課題や、提案技術について理解を深めた。「お話し可能」とする企業も現れ、マッチングへの期待が高まる場面もあった。

九州フォーラムは、インフラメンテナンス国民会議の公認フォーラムとして2018年1月に設立。ことし1月には福岡市で第1回ピッチイベントが開かれ、提案技術のうち、「スマホを活用した現場での効率的な情報取得」「弾性波レダシステムITEC法」「高機能長耐久性防食防水テープ」の3技術を、シーズ説明した熊本県長洲町などで実証実験する計画だ。

林野が市面積の8割を占める日田市は、山間部に多くの橋梁があり、ドローンなどといった、高所作業車や橋梁点検車を使用しない点検技術を要望。また、国東市と同様に、高速道路の跨道橋の点検技術の提案も求めた。

これらに対し、特殊高所技術が「特殊高所技術工法」、日建コンサルタントが「UAVおよび赤外線サーモグラフィを活用した橋梁点検、クラウド型GISシステムを使った道路ストック管理」、富士ピー・エスが「コンクリート内部欠陥の非破壊調査技術（FITS A）」、CACHが「ひずみ・亀裂モニタリング（監視）システム」をそれぞれ提案した。

この後、2自治体と提案企業が抱える課題や、提案技術について理解を深めた。「お話し可能」とする企業も現れ、マッチングへの期待が高まる場面もあった。

九州フォーラムは、インフラメンテナンス国民会議の公認フォーラムとして2018年1月に設立。ことし1月には福岡市で第1回ピッチイベントが開かれ、提案技術のうち、「スマホを活用した現場での効率的な情報取得」「弾性波レダシステムITEC法」「高機能長耐久性防食防水テープ」の3技術を、シーズ説明した熊本県長洲町などで実証実験する計画だ。